

05・予定よりも早い来訪

本編04の数時間後。

とある年の春。十八時ごろ。

場所は、主人公のおじ・おばが住む屋敷の客間。
天気は晴れ。気温は十八度程度。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【建物の中から、外の環境音が聞こえる】

【0—10秒ほど流して『メルヤ』のセリフ】

【その後、フェードアウトする】

〈主人公〉

「ん……
♡ ちゅ ♡ ちゅ ♡ ちゅ ♡
」

主人公とメルヤ、部屋の中で、立ったまま睦み合っている。

この瞬間に至るまで、何度も何度も愛し合って、お互いの気持ちを確かめ合って。

先ほども一度は『そろそろチハ達のところへ行ってみようか』と話がまとまりかけたはずだった。

だが、着替えを終えた途端またいちゃいちゃしたくなってしまうて……。こうなってしまったのだ。

● 正面 0センチ

「【※6回※】 呼吸する。

とても荒く、早い、余裕のない呼吸。

何とか整えようと、だんだんゆっくりになる。

『いかにも、直前までセックスしていた』という感じの、えっちな雰囲気呼吸】

ふーっ、はー。

ふーっ。はー。

ふううっ。はー……っ ♡

【※3回※】 キスする。

唇に軽く触れるのを繰り返すキス。

恋人にする、とても甘々なキス」

ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡

【甘々に、媚びた感じで、可愛く怒って。

その癖嬉しそうに、甘々に。

言葉では叱っているが、ちっとも嫌がっていないし、怒っていない声で。

それどころか『すぐ気持ちよかった。幸せだった。時間の許す限り、もっとセックスしたい。今したい』と言っているような感じで。

トラック04からさらに親しくなった、甘々な感じで」

もう……ご主人様ったらあ……♡

ずっとダメって♡

ダメって申し上げましたのに♡

しっぽもおまんこも、変になるまで気持ちくしてえっ……♡

もおひどいっ……♡

ひどいですっ……♡」

〈主人公〉

「えへ……♡ ごめんね、めーちゃん……♡」

主人公、口では謝っているものの、まるで悪びれない様子でメルヤの身体をまさぐる。こんな事をしたら『しわになってしまうではないか』と指摘されそうなものだ。

なのに、されないのをいい事に。

背後から抱きついて、胸やお尻を、そしてしっぽを触りまくっている。

メルヤはそれを、幸福そうに受け入れている。

●正面 0センチ

「【※3回※】呼吸する。

とても荒く、早い、余裕のない呼吸。

だんだんと少しゆっくりになる。

『いかにも、直前までセックスしていた』という感じの、えっちな雰囲気呼吸】

はあ……はあ……はあ……♡

【※3回※】キスする。

お互いになっぷりと求め合う、甘々なキス】

んちゅっ……ちゅっ♡ちゅ♡

【甘々に、媚びた感じで、可愛く叱る。

やはり、言葉では叱っているが、ちっとも嫌がっていないし、怒っていない声で。

それどころか『本当に素晴らしい体験だった。忘れられそうもない。今すぐまた同じ事

がしたい』と言っているような感じで」

もお、ダメですよ？

本当にいけませんよ？

【※1回※ キスする。

唇に軽く触れるだけのキス。

恋人にする、とても甘々なキス」

ちゅ♡

【※3回※ キスする。

ディープキス。

お互いになっぷりと求め合う、甘々なキス」

んっく……♡

んう……んうううっ……♡」

SE2 主人公がメルヤの身体をまさぐる音

【最初から最後まで流す】

【2回繰り返して流す】

● 正面 0センチ

「高く小さい声で、びくつと喘ぐ。

主人公がまたメルヤの胸を触りだしたので」

あ♡

「甘々に、媚びた感じで、可愛く怒る。

嫌がっているどころか『ぜひ、もつとして下さい』という感じで」

またおっぱい揉むう……♡」

〈主人公〉

「うん♡ 揉むう……♡ めーちゃんの身体気持ちいの♡」

主人公、媚びた甘えた声でささやきながら、メルヤに触れ続ける。

先ほどの行為で、二人の距離はすっかり縮まった。

今はもうこの通り、本当の恋人のように気持ちを伝えられている。

● 正面 0センチ

「高く小さい声で、びくつと喘ぐ。

主人公がまたメルヤの胸を触るだけでなく『乳首当て』までし始めたので」

あ♡

【※4回※ 呼吸する。

あからさまに激しく興奮している呼吸。

主人公から積極的に迫られて、とても嬉しく、今すぐセックスをしたくなっている呼吸】

ふーっ、ふーっ。ふーっ。ふーっ……♡

【少しわざとらしく、口先だけで拒否する。

本当はもっとしていたいが、そろそろチハ達に顔を見せに行こうと話していたのも本当なので。

だが『チハ達と特に約束していない以上、実際にいつそうするかは主人公次第だ』と思っている。

『主人公がこのまま強引に押し流してくれるなら、ぜひまだセックスをしたい』と思っている。

『今のご主人様でしたら、すっかり回復されましたから。皆も顔を見たら安心すると思います』と言おうとして途切れる】

……ほ、ほら。まだ早いですが、そろそろ皆（みな）に顔を見せに行（ゆ）きませんか？
今のご主人様でしたら、きつと……」

SE3 主人公がメルヤのしっぽを愛撫する音

【最初から最後まで流す】

【▲1 でフェードアウトする】

主人公、メルヤがすべて言い終わる前にしっぽをさらにまさぐり、さらにその唇をふさいでしまう。

●正面 0センチ

「【※1回※】キスされる。

有無を言わず、唇をふさがれるキス。

同時にしっぽを触られ始めるが、嫌がるどころか、自分から開いて受け入れている】
ん♡

【※3回※】キスされる。

主人公から思いっきり攻められる、受け身のキス】

ちゅば♡

んっ……♡

んんううっ……♡

【高い声で、小さく、びくつと喘ぐ。

軽くいったような声が出る。

キスをしながらしっぽを触られて、とても気持ちがいいので】

主人公、メルヤが止めるのも構わず、さらにメルヤを愛撫し続ける。

メルヤのしつぽを受け入れ、直接体内に催淫液を流し込まれたという事実は、主人公に大きな自信を与えた。

『二人はお互いにお互いの初めての相手になって、特別な関係になった』

『まだ正式な恋人とは言えずとも、お互いの大切な存在になれた』
そう思っていると、感じ始めているのだ。

こうなれたのは、催淫液の事もそうだが、メルヤのしつぽに對して、強い愛情が沸いた事も大きい。

それは説明のつかないほど大きく、内側から満たされるような想いだ。

メルヤのしっぽに触れている時、主人公は、

『わたしは、めーちゃんのすべてが好きだ』

『まだ知らないところも沢山ある。中にはもしかすると、わたしにとって驚きだったり、あまり嬉しくなかったりする事もあるかも知れない。』

「だけど、そんなところもきつと受け入れて……すぐには難しい事もあっても、いつか好きになれる」

と、思える。

その想いが、主人公を大胆に、正直にさせていくのだ。

今はまだその調節がきかず、暴走気味になる事もあるが……今の主人公はすっかりメルヤに甘えて、この新しい愛情表現を楽しんでいた。

●正面 0センチ

「※4回※ 呼吸する。

とても荒く、早い、余裕のない呼吸。

興奮して、段々さらに早くなっていく」

はーふう、はーふう、はーふう、はーふうっ ♡

「あまあまに。

もう『怒っているふり』すらやめてしまう。

主人公とこうしていちやいちやできる事が、とにかく嬉しいので」
もう……薬はほとんど抜けたはずなのに。

本当にいやらしい方っ…… ♡

ですね…… ♡

「※1回※ キスする。

唇に軽く触れるだけのキス。

恋人にする、とても甘々なキス」

ちゅ♡

はあ、はあ、はあ。

【※1回※ キスする。

唇に軽く触れるだけのキス。

恋人にする、とても甘々なキス」

ちゅ♡

【うっとり甘々に。

かつ、とても興奮していて、とても幸せそうにしている感じで。

また、主人公への想いを止められなくなり、このままセックスする気になっている」

ああ好き……好きです、ご主人様……♡」

〈主人公〉

「わたしも好き。大好きだよ、めーちゃん……♡」

●正面 0センチ

「【※6回※ 呼吸する。

甘ったるい、何かを期待しているような呼吸。

だんだんと少しゆっくりになる。

いかにも『このまま放っておけば、またセックスが始まりそう』と思わせるような呼吸】

はー、はー、はあ。

はー、はー。はあ……♡」

SE 4 チハが扉をノックする音

【最初から最後まで流す】

【かなり遠くで聞こえる】

だが、そんな二人の時間は、ここで一度途切れる事となる。
大切な報せを持って『彼女』がやってきたのだ。

▲ 1 ここでSE 3がフェードアウトする。

▲ ボイス加工あり

【かなり遠くで聞こえる】

【ドア越しに聞こえる】

〈チハ〉

「真面目に落ち着いた声で、ドア越しに呼びかける。

部屋の中の様子は聞こえていない」

治療中ごめん。大将、メル姉（ねえ）。入っていいか？」

● 正面 0センチ

「※息づかいだけ※ で表現する。

驚いて、かつ、とても恥ずかしそうに。

チハのいる位置と声の感じからして、主人公とメルヤの行為を聞かれたとは考えにくい。
それでも、とても恥ずかしくなってしまったので」

……っ！」

SE5 二人が慌てて離れる音

【最初から最後まで流す】

二人、身体を離して顔を見合わせると、すぐに扉の向こうの人物に声をかける。
真剣な声だ。

おそらく、今すぐ伝えたい事があるのだろう。

〈主人公〉

「どうぞ！」

● 正面 15センチ

「※2回※ 呼吸する。

大きく深呼吸する。

つい数秒前まで自分達がしていた事を悟られないように、慌てて普段の声の感じになるように整えている」

はあ……すう……。

「穏やかに落ち着いた声で、ドア越しに呼びかける。

普段の『亜人の少女達のリーダーでお姉さんの存在のメルヤ』に、大急ぎで戻っている
感じで」

どうしたの？ どうぞ。入って」

だから二人は慌てて服を整えると、扉の外にいるチハに返事をした。

SE 6 チハが扉を開ける音

「最初から最後まで流す」

「かなり遠くで聞こえる」

そしてチハが告げた言葉は……やはり、今この屋敷にいるもの全員にとって、最も大切な情報だった。

▲ ボイス加工あり

「かなり遠くで聞こえる」

「だが、声を張っているので、あまり小さくは聞こえない」
〈チハ〉

「ガラテア様達が到着した！」

「感激した様子で。」

本編01でのガラテアのセリフ『君達の思いに報いる為にも、迅速に向かうと約束する』という約束通り、本当に早く来てくれた事感動しているのだ」

すごいよ……本当に予定より早く、ぶっ飛ばして来てくれたんだ！」

ここでフェードアウトして終了。